

特集 より良い町へ ～町内会(自治会)の取組み～



「遠くの親戚より近くの他人」とい言葉を知っていますか？ 何かあった時に助けてくれるのは、遠くで暮らす親戚よりも、近所に住んでいる他人の方だという意味のことわざです。

町内会(自治会)は、そんな隣近所に住む人たちが豊かで住みやすい町づくりを目指し、自主的に結成された任意の住民組織で、町内に28団体あります。

東日本大震災以降、「防災」という観点から町内会の大切さは再び注目されつつあります。また災害時だけでなく、日常で困ったことがあった時、例えば一人暮らしだけでは体が不自由で家事が難しい、買物に行きづらい、そんな時に町内会に相談し、助けてもらえることがあるのです。

他にも町の「環境」を一緒に守る活動、「文化」を継承することを通じて、子どもから高齢者までがふれあう活動。特別な活動をしていなくても、日常的に情報交換をしたり、支えあったり……。今月の特集記事では、そんな取組みをしている町内会(自治会)の一部を紹介します。同じ町で暮らす人々と、いざという時に助け合える仲ですか。

たすけ愛隊(3ページ)で草刈りを依頼した小野田さんときれいになった庭の写真を見せている隊副会長の矢嶋さん

***町内会(自治会)って？**

「遠くの親戚より近くの他人」とい言葉を知っていますか？ 何かあった時に助けてくれるのは、遠くで暮らす親戚よりも、近所に住んでいる他人の方だという意味のことわざです。

町内会(自治会)は、そんな隣近所に住む人たちが豊かで住みやすい町づくりを目指し、自主的に結成された任意の住民組織で、町内に28団体あります。

東日本大震災以降、「防災」という観点から町内会の大切さは再び注目されつつあります。また災害時だけでなく、日常で困ったことがあった時、例えば一人暮らしだけでは体が不自由で家事が難しい、買物に行きづらい、そんな時に町内会に相談し、助けてもらえることがあるのです。

他にも町の「環境」を一緒に守る活動、「文化」を継承することを通じて、子どもから高齢者までがふれあう活動。特別な活動をしていなくても、日常的に情報交換をしたり、支えあったり……。今月の特集記事では、そんな取組みをしている町内会(自治会)の一部を紹介します。同じ町で暮らす人々と、いざという時に助け合える仲ですか。

福祉

無縁社会を地縁社会へ 堀内12町内会のたすけ愛隊



***気軽に頼ってほしい**

3000世帯以上が加入する堀内の12町内会が連携して行う「たすけ愛隊」（正式名称は堀内地区小地域福祉活動懇話会）。一人暮らしの高齢者や体が不自由な人などの「ちょっとした困りごと」に1時間600円で支援を行っています。町社会福祉協議会の補助を受け、昨年9月に始まったこの取組みは、話し相手から家事援助、弁護士による法律相談（3000円）までと幅広い内容です。

会長の三橋政昭さんは結成について、「『介護保険などの公的サービスを受けるまでではないけど、ちょっとしたことでも近所に頼める人がいれば嬉しい』という要望に、町内会として応えたいと思った。無償では利用者も気を遣ってしまうだろうと考えたのは、たすけ愛隊のメンバーも60代・70代が多くて、困っている高齢者の気持ちに寄り添えたからだと思います。」と話してくれました。

人々の関係が希薄になり「無縁社会」と呼ばれる現代で、たすけ愛隊は気軽に助け合える「地縁社会」を目指しています。利用したい人、支援ボランティアがしたい人は、☎0901496312252（9時～17時）までお問合せください。

利用者の方に感想を聞きました！

**隣近所との人間関係はとても大切、
今後もたすけ愛隊には頑張ってもらいたい。**

7年ほど前に寝たきりになり、庭の草刈りなどができなくなったという小野田さん。回覧板のチラシを見てもまずは相談してみようと、すぐに電話をしたといいます。

「初めはここまでしてもらえなかったです。草刈りする前、終わったあとの写真を見せてくれながら丁寧な説明をしてもらっています。以前はプロの人に頼んでいたこともありましたが、こんな低価格でここまでしていただいて、本当に驚きましたし、それと同時に感謝しています。



子どものころは、隣近所の人と協力して庭掃除でもなんでもやったけど、今はそうもいかないですからね。でも、たすけ愛隊をはじめとして、町の人々は温かい。どんなに景色が素晴らしいところに住んだとしても、結局住みやすさというのは、人間関係によるものだと思います。今後は夏に向けてすだれの設置や片付けなども、たすけ愛隊の皆さんに頼もうかと思っています。」

今回たすけ愛隊として活動した矢嶋さんは、「私たちは福祉のプロじゃない。もちろん草刈りだってプロのようにはできません。しかし素人だからこそ『気軽に頼める近所の人』として、これからも頼ってほしいですね！」と今後の意気込みを語ってくれました。

葉山一色台自治会オリジナル みんなの資源小屋

二人ともこっちに来てごらん！

カゴに表示された大きな文字で
分別が簡単にできそうだね！



わ～カゴがいっぱいあるよ！



缶が磁石にくっついたよ！

置いてある磁石にくっつくものは
スチール缶のカゴに入れよう



この缶や
フライパンは
どこに持って
行くの？

環境

資源小屋の秘密を
もっと知りたい人は、5ページを読ん
でね！



このビニールなん
だか知ってる？

紙が濡れないよう
に雨よけかな？
(大正解★)

顔が描かれた
面白い看板を
見つけたよ～



「ビン・缶・ペットボトルは洗って
出しましょう」という大事な注意
書きも、これなら目立つよね☆

より良い町へ～町内会（自治会）の取り組み～

*一色台が抱えていた問題

約100世帯が暮らし、自治会加入率は100パーセントの一色台。冬場の雪かきや凍結対策などを自治会が率先して行う積極的に近隣で協力体制がとれている地区です。しかしそんな一色台にも悩みがありました。それは「ごみステーション」。

山の上であるこの地区はカラスが多く、またルール違反のごみ出しで、ステーションのごみが散乱するなどの問題が多発していたのです。

そこで立ち上がったのは、一色台に住み、2008年度に町のごみ減量等推進員を務めた松本恵里子さんと能丸光代さんでした。

「ごみの分別や生ごみの自家処理の勉強会をしましたが、残念ながら改善できませんでした。でも同時期に町民有志が開催した【ゼロ・ウェイストを学ぶ会】に参加し、徳島県上勝町の事例から後の資源小屋のヒントを得ることになったんです。」と松本さんは当時を振り返ります。

その後は町の環境課からゼロ・ウェイストのモデル地区事業について打診を受け、有志の「モデル地区委員」も立ち上がり、住民の合意を受けて2009年9月から一色台はモデル地区となりました。

広報はやま6月号

*みんなの資源小屋、という意識

ほとんどの家庭が生ごみを自宅で処理するという第一ステップを達成した一色台地区は、次に第二ステップである戸別収集と資源物の分別・収集方法に取り組むことになりました。「紙類やビン・缶などをわかりやすく置いて、いつでも出せる場所……資源小屋が必要だ!」との結論に達し、2009年10月に一色台西公園への設置が決まります。小屋の建築は限られた予算のため、住民ボランティアの協力を得て、翌年3月に完成し、文字通りみんなの資源小屋となりました。

その後も戸別収集の開始や資源小屋の運用について、松本さんや能丸さん、モデル地区委員会のメンバーを中心に意見交換会などを重ね、2010年5月には可燃ごみ量がモデル地区開始前に比べ、72パーセント減という結果を出しました。

ごみ減量の背景には、委員会の地道な努力はもちろん、住民みんなが自分たちの地区をより住みやすくしようと考え、協力しあったからでしょう。道路にごみステーションがない一色台の町並みはとてきれいです。この景色が続くよう、これからも協力を続けなくてはなりません。

*小屋を中心に行けるコミュニティ

資源小屋の管理や清掃は当番制にしています。特徴的なのは当番ノートの存在です。自治会副会長の土屋さんは「ノートは気付いた点を書くことから始めました。しかし多くの人が前任者のノートを読むことで改めて分別方法を学んだり、今まで見えていなかった管理や清掃の苦労を知ることができたりしたと言っています。」と話してくれました。

また年に一度、自治会で呼びかけて小屋のペンキ塗りを実施しています。「ボランティアが集まり、学生のころのように一生懸命になってペンキを塗る。みんなでわいわい言いながらする作業は、なかなか楽しいものです。」と土屋さん。

松本さんは「分別に迷っているのかな、という人がいたら声をかけて、自然とそこから会話がはずむ。そんなコミュニケーションの場所にだってなっています。」とのこと。

資源小屋の設置によって実現したのはごみの減量や、きれいな町並み、カラス被害防止だけでなく、新しく大切なコミュニケーションでもありました。

これからも
きれいな町を
守っていきましょうね!



取材に協力してくれた
葉山一色台自治会の皆さん
松本さん（右上）、土屋さん（左上）、しゅみちゃん（左下）、まおちゃん（右下）

文化

記憶の中で里山がよみがえる 木古庭・上山口町内会のふるさと絵屏風

***ふるさと絵屏風って？**

かつては自然の恵みをうけて、産地消の中で人々が暮らした里山の風景が、時代の変遷に従って、今ではほとんど見られなくなりました。「ふるさと絵屏風プロジェクト」では、そんな里山の記憶を絵屏風に描きおこし、後世に伝承していくことを目的としています。

このプロジェクトは、大和ハウス工業(株)の支援を受け、木古庭・上山口町内会が協力して絵屏風を作成することを決めたものです。絵屏風は、①五感体験アンケート②聞き取り調査③下絵の制作④絵図の制作⑤絵図の完成⑥絵図の活用という段階で作られています。作業は5月現在で①五感体験アンケートを基にして、聞き取り調査を始めたところです。

4月14日には、各地の絵屏風づくりを「心象図法」の学術として考案された滋賀県立大学の上田教授を招き、シンポジウムが開催され、約90人が参加しました。

ふるさと絵屏風に関する次回の打合せは、6月16日(日)に木古庭会館で実施予定です。詳細は、木古庭町内会長の伊東(☎0788-79903)か上山口町内会長の倉林(☎0788-17894)まで。

「決して教科書には載らないけれど、みんなが経験したよね。」

公開聞き取りでは、男の子は誰もが遊んだというネコハエトリ(クモの一種)を戦わせる「フンチ」を持参した人がいて、その話で大いに盛り上がりました。



より良い町へ～町内会（自治会）の取り組み～

広報はやま6月号



▲滋賀で作られた『近江八坂図』という絵屏風（岡村康臣画）

*シンポジウムのように

4月のシンポジウム「葉山の里山再生」では、上田教授による講演があり、教授は「ふるさと絵屏風は百聞を一見にするもの、たくさんの想い出を集めて描くものです。大河ドラマになるような英雄を扱うわけはない、本当に身近で地域に根ざした庶民の生活のようすを描き、未来

の子どもたちにそれを伝えましょう。」と絵屏風の目的を明らかにしました。公開聞き取りでは、参加した地域の女性Aさんが「昔は子どもが多く、お手伝いは家事・子守・走り使いがほとんど。水道なんてもちろんないから、下校したらまず水汲み。それが普通でした。」と水道がある現代では見なくなった風景を教えてくださいました。同じく参加者の女性Bさんは「手伝いを兼ねた遊びで、上級生と草履を作ったことが印象的です。それで通学したり、都会から来て草履を作れない先生には、私たちが教えたりもしました。あと上級生の言うことには絶対に従う、という昔ならではのルールもあったかな。」と当時の遊びや服装について話しました。



▲上田洋平教授の講演

男性参加者のCさんからは「今は禁猟だけど、昔はパッチンという罠を作って、ホオジロなどを捕まえ、隣の町まで売りに行っていました。鳴き声が良いと高値で売れるから、どんだん鳥の生態や習性にも詳しくなりましたね。」と遊びから学んだことを話しました。

このように、皆さんが当時五感で体験したことが絵屏風に描かれています。今後に向けて、上田教授は「作った絵屏風は百年後に文化財、二百年後には国宝になるかもしれない。」と後世に継承していく気持ちを確認しました。二つの町内会が協力して文化継承をする取組みで、今よりコミュニケーションも活発化します。来年末に完成予定とのことですが、皆さんも昔の里山の風景が絵屏風としてよみがえる日を楽しみに待っていてください。



▲幼少期の思い出がいっぱい

取材を終えて

近年、「年をとって積極的に参加できないから」、「町内会に加入するメリットがわからないから」などの理由で加入率が減少している町内会（自治会）。しかし各町内会ではその地域に合った取組みが多く、今回の特集では、そのほんの一部を紹介しました。

取材を通して、様々な町内会長や会員の方にお会いしましたが、皆さんが本当に町のことを思い、とても努力をされているようすが伝わってきました。町内会に参加したいがどのような手続きをとってよいかわからない人は、町民サービス課（☎内線205）までお問合せください。

（広報担当 高野）